

BURRN! 2015年2月号臨時増刊 平成26年12月19日発行・発売 第32巻・第3号・通巻446号

METALLION

BURRN!

SPECIAL ISSUE
BURRN! 2月号臨時増刊



MR. BIG

JAPAN TOUR

SPECIAL REPORT
& EXCLUSIVE INTERVIEWS

VOL.52

MATT STARR

見事に助っ人を務めた“歌えてギターも弾けるドラマー”マット・スター
実際に聞こえている以上に難しいバットのプレイに学び
曲に取り組んでみて改めて気づかされたMR.BIGの凄さとは!?

BURRN!

Angato! It has
been a pleasure to
meet & perform for
you. Can't wait to
see you soon! MATT
P.D. 79-

このツアーで文字どおりMR.BIGを大いに助け、2人ドラマー、マット・スターにも、名古屋公演の日に話を聞くことが出来た。開演前のミーティングには彼は参加しないので、ファンに会いに出掛けたバンドを見送って、インタビュー開始。パットに似たスタイルでドラムを叩き、コーラスも取れて、人柄も申し分ないという、今回の任務にはまさにうってつけの人材を発掘してきたビリーの嗅覚はさすがだ。日本の後は台湾、香港、シンガポールと廻って帰国したと思ったら、12月にはマットはBURNING RAINの西海岸ミニツアーに参加して忙しかついていたようである。BURNING RAINという名前は今回のインタビューでは出てこなかったが(自分のやってきたこと、やろうとしていることを全部売り込んでやろうとがっついたようなところがないのも、マットが業界の先輩達に愛されるポイントかもしれない)、当時はまだWHITESNAKEにいたダグ・アルドリッチがその活動の合間を縫って2012年から制作、2013年にリリースしたBURNING RAINの13年ぶりのアルバム「EPIC OBSESSION」ではマットがドラムを叩いている。

—日本は初めてですか？

マット・スター(以下M):いや、日本に来たのは二度目なんだ。初めて来たのは1999年だったかな。FLAMESというバンドで来た。

—今回のMR.BIGのツアーには誰から、どのようにスカウトされたのですか？

M:ビリーが電話をくれたんだ。夏の間にね。何年も前からあちこちで顔を合わせて挨拶したことはあったけど、彼が俺のプレイを観たのはその電話の1年ほど前のことだった。あるジャムで、俺はドラムを叩きながら歌っていたんだ。それが終わるとビリーがバックステージにやって来て言った。「君は誰だ？」そして「電話番号を教えてください。君と連絡が取れるようにしておきたい」と言うので俺は連絡先を教え、以後も時々顔を合わせることはあったけど、この夏に電話が掛かってきたんだ。俺は「彼が言ったのは、「2回ほどショウでドラムを叩いてもらいたいんだが、興味はあるか?」ということだった。「勿論」と答えると、バンドの全員と会うことになった。その前に、ビリーから「君にいろいろ話しておく」と事情を全部打ち明けたんだ。パットのことをね。へヴィな話だった。MR.BIGとツアーが出来ると同時に、伝説のドラマーがそんな病気で苦しんでいることを知ると胸が潰れそうになったよ。それからビリーと「Take Cover」と「Daddy, Brother, Lover, Little Boy」を一度ずつプレイしてみたら、彼は「いいじゃないか」と言った。そしてツアーの1ヵ月後バンド全員と会ったんだ。約束の時間よりも早く着いたら……俺はいつもそうするようにして来たけど、パットも時間前に来て、2人だけで20

分ほど話が出来たのはよかったな。ただ話をして、それがとてもいい感じだった。

—以前にMR.BIGのライブを観たことは？

M:ないんだ。勿論バンドのことは知ってたし、他にも10曲ぐらい知ってる曲はあったけど、彼らのことは今ほどよく知ってはいなかった。曲に取り組んでみて一番感銘を受けたのは、彼らのソングライティングがいかに強力かということだ。彼らの驚異的なミュージシャンシップについては勿論知っていたけど、曲がとにかく強力なんだ。それにアレンジメントがとてもしっかりしている。曲の終わりをダラダラ引き延ばさず、最後のサビは1回、多くても2回。ポールとビリーがタッピング合戦をやるのも曲の真ん中で、それは曲を盛り上げるうえで効果を発揮している。クレイジーなインストゥルメンタルパートと曲そのものをブレンドする上手さには驚かされたよ。

パットのプレイについても同じだ。非常にテクニカルなこともやっているのに、それをとても音楽的に聴かせている。そのプレイを習得しようとすればするほど、実際に聞こえている以上にハードなことをやっていたんだと気づかされたよ。

—パットからは何か特別なプレイのコツを教えてもらいましたか？

M:ああ、何曲かで、こんなやり方もあるよ、というのは見せてもらった。「Take Cover」のビートに関するところが一番大きなアドヴァイスだったんだけど、俺が右足でやっていることを、彼はハイハットの方の足でやっているところがあって、聴いた限りではそんなことは全然判らなかつた。それとか、ダブルベースの普通のやり方とはちょっと違うテクニックで「Colorado Bulldog」をプレイしているのを教えてくれたりした。そういう、これまで使ったことがなかったテクニックを教えてもらったのも助かったし、何よりよかったのは総ての曲を……俺は28曲覚えただけで、その28曲の総てをおさらいして、ここはファンが聴きたがるパートだから変えない方がいい、ここはちょっとアレンジを加えて自分なりに叩いても大丈夫、というパートを教えてもらえたことだ。最初からそうやって彼のアドヴァイスを仰ぐことが出来たのはとても助かった。

—ニュー・アルバム「...THE STORIES WE COULD TELL」でのドラミングはパットの生ドラムではなく、プログラミングした音だということですが、それは聴いて判りましたか？

M:判らなかつた。俺は気づかなかつたよ。どうやってたらそんなことが出来たのか判らないけど、きっと、パットは本当に細かいところまで気を配って作り上げたんだと思う。まさに彼のスタイルというプレイになっているからね。彼のフィールがちゃんと取り入れられている。一体どうやったんだろうと思うけど、彼は本当に見事にやってのけたよ。だって、俺は大抵、ドラマーじゃなくてマシンを

使っている時はそうだと判るから。マシンだと、人間によるドラミングとはやっぱり違うんだよ。でもパットの仕事は見事だった。

—プレイするうえで、一番のお気に入りのMR.BIGのソングはどれですか？

M:う〜ん、そうだな……「Daddy, Brother, Lover, Little Boy」は凄く楽しい。ハイ・エナジーで突っ走る感じがね。「Colorado Bulldog」も楽しい曲だ。俺はこれまであまりダブルベースをプレイしてこなかったんだ。1984年にVAN HALENの「Hot For Teacher」を聴いた時に真似してみたくらいで、その後はダブルベースはやらなくなった。だから今回改めてダブルベースに挑戦出来たのは面白かったよ。「Colorado Bulldog」という曲そのものもプレイしていて楽しいしね。

—そもそもあなたはいつ、どのようにドラムをプレイし始めたんですか？

M:始めたのは……5年生の時だったと思う。年齢で言うと8歳か9歳の時かな。俺はギターを買ってくれと母親にねだったんだ。「J.C.Penney」っていう大きなデパートのカタログがあって、クリスマス・プレゼントをそこから選んでいいと言われてたんで、ページをめくりながら「これが欲しい!」「あ、やっぱりこれ!」ってやってたら、あるページに来てギターを見つけ、「これが欲しい!」と言った。そして、いざプレゼントが届いたと思ったら、それはギターではなく自転車だった。(笑) それはそれで最高のプレゼントだったけどね。でもやっぱりギターが欲しかったからそう言ったら、「ドラムだったらやっていいよわ」って言われて……ギター・プレイヤーになりたいのに、なんでドラムなんだよ、とは思ったけど、結局はスクール・バンドに入った。1ヵ月ほどいたのかな。でも、ドラマーは木ぎれを持って後ろにずらりと並ばされて、「音を立てないで!」と言われ、先生はフルートやチューバの子に掛かりきり。ドラムを教えてもらえるのはレッスンの時間の最後5分だけっていう感じだね。少年達が黙って座ってられるわけもなく、ドラムを引っぱたいたり、話し始めたり、笑い出したりで、こんなやってられないってことになって抜けたんだ。

それから、ジャズの先生についてドラムを習うことにした。いい先生だったんだけど、それは数ヵ月しか続かなかつたな。ジャズとロックにはたくさんさんの共通点があるのに、先生はそこを説明することなく、ただジャズだけを俺に教えるようとしたんだ。そして俺が教わりたのはジャズではなかった。ロックだった。ロックにだって、ダッダダッダダッダダッダ、というジャズのスウィング・リズムが使える曲があるんだけど、先生はそういう接点を教えてはくれなかつたから、習いに行くのを止めた。その後は、MÖTLEY CRÜEの「SHOUT AT THE DEVIL」(1983年)をお手本に、全曲コピーすることでドラミングを覚えていった。時々

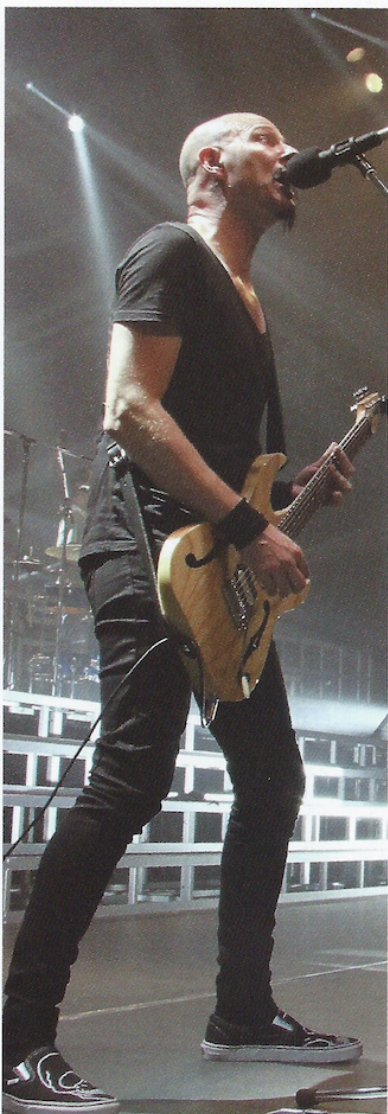
レッスンを受けに行ったことはあるけど、殆どは独学で身に着いたんだよ。

——プロフェッショナルなドラマーとして活動した最初のバンドは？

M: LAに来て最初に入ったのがBEAUTIFUL CREATURESだった。彼らの最初のレコード(2001年「BEAUTIFUL CREATURES」)は「Warner Bros.」から出ていたけど、俺が参加したのは2枚目(2004年「DEUCE」)だ。今ALICE COOPERにいたグレン・ソベル<ds>の後任として入った。今はGUNS N' ROSES(及びSIXX:A.M.)にいるDJ・アシュバ<g>がバンドを辞めたんで、その後任に今はQUIET RIOTをやっているアレックス・グロッシが入り、俺は彼に呼ばれて加入することになったんだ。それがプロのドラマーとして最初の仕事。もっとも、自分のバンドではなく、雇われメンバーだったけどね。

——なるほど。その後は？

M: ケヴィン・ダブロウ(元QUIET RIOTのシンガーで2007年に死去)がソロ・アルバムを作るのを手伝った。2004年から2005年か、そのくらいだったと思う。その後は歌うことに戻った。そもそもの最初は自分で曲を書いて歌っていたんだ。ギターを弾きながら歌っていた。AUTOMATIC



MUSIC EXPLOSIONというバンドを組んで、かつてBLONDIEやKNACKやSWEETやスージー・クアトロを手掛けたマイク・チャップマンというプロデューサーと一緒にレコードを作ったんだけど、今から4年ぐらい前かな、再びドラムをプレイするようになった。

——そして今はエース・フレリーのバンドにいるんですね？

M: そう、ドラマーに戻って最初に手に入れた仕事こそだ。彼はドラマーを必要としていると同時に、KISSでポール・スタンレーが歌っていた曲を担当出来るシンガーも探していたんだ。最初は悩んだよ。シンガーとしてキャリアをスタートして、ドラマーに転向して、歌に戻って、やっぱりドラムをやろうと決めた途端に、ギグで4~5曲歌わなきゃいけなくなったんだからね。でも、それがやれるのは最高だと思って話を受けたんだ。彼の「ANOMALY」(2009年)というソロ・アルバムのツアーに参加することになり、2回のショウを終えた時点で彼から「次のアルバムを作る時は手伝ってくれ」と言われた。ほぼ1年掛けて彼とアルバムを作っていて、その「SPACE INVADER」が今年リリースされたんだ。だから来年はそのツアーをやることになると思う。

——何故だか、歌の上手いドラマー、もしくはドラマーとしてスタートして後にシンガーに転向する人って多いですね。AEROSMITHのステイヴン・タイラーも最初はドラマーでしたし、MÖTLEY CRÛEのトミー・リーも自分で歌ってソロ・アルバムを作っていますし、元GUNS N' ROSESのマット・ソールラムも、勿論パット・トビーもそうです。

M: そうだね。リード・シンガーに元はドラマーだった人が多いのは興味深いことだと思う。ステイヴン・タイラー然り、イギー・ポップ然り。ドラムはボトムを支える楽器だ。それと、歌というトップにある部分には、繋がりがあるんだろう。ステージでもドラマーとシンガーが中心にいて、ギターとベースは両サイドにいる。多くのドラマーが歌もやるって理由がよく判らないけど、シンガーとドラマーというこの2つのパートには、他のどのパートよりも強い何らかの繋がりがあるんだと思う。俺はステージでは常にシンガーを見ている。シンガーが出す合図を見逃さず、彼らが必要としているものを然るべきタイミングで与えるのがドラマーの仕事だと思っている。

——シンガーでもあるあなたから見て、エリック・

マーティンはどういふシンガーですか？

M: 彼は素晴らしいよ。ポール・ロジャースやルー・グラムにも通ずる、ソウルフルでブルージーな声を持っている。でも、やっている曲はよりポップなテイストを備えたブルーズ・ロックだ。彼は才能豊かなシンガーだと思うし、自分のやるべき音楽をよく判っている。ソウルフルでパワフルな、本当にグレートなシンガーだよ。

——ところでこのツアー中の休みの日には、日本のレコード会社ディレクター氏におすすめのレコード・ショップを訊いて、レコードを買いに出掛けたりしていたそうですね？

M: うん、どこの街でもね。東京でも大阪でも行ったし、ここは……名古屋だっけ？ そう、この名古屋でも、レコードを探しに出掛けた。

——レコード・コレクターなんですか？

M: ああ。自宅に2,000枚ほどのレコードを持っている。日本盤はそれほど多くなかったんだけど、今回あれこれ買い込んだから、それを持って帰るのにもう1つスーツケースを買わなきゃいけなくなった。今のバッグに詰め込むと重量オーバーになって、空港でとんでもない超過料金を取られてしまうからね。日本盤のレコードは子供の頃から時々目にしてたんだけど、帯があって、日本語が書かれてて、アメリカ盤とは写真も違って、ブックレットが付いていたりもして、日本盤を見つけるとワクワクしたものだよ。今こうして日本に来てみると、アメリカ盤で既に持っているものの日本盤がたくさん見つかって、どれも買わずにはいられなかった。たまたま楽しくないよ。(笑) それに日本の中古盤は丁寧に扱われているから、とても綺麗なんだ。アメリカだとこうはいかない。面白いのは、アメリカのショップでよく見掛けるSTEELY DAN(1972年に結成されたアメリカのジャズ・ロック・バンド)のアルバムは大抵良好な状態なんだけど、RAMONES(1974年結成、1996年に解散したアメリカのパンク・バンド)のアルバムは必ず傷だらけだってこと。(笑) どういう人が集まっているかによるんだよね。

——あなたの“人生を変えた5枚のアルバム”を挙げていただけますか？

M: MÖTLEY CRÛE「SHOUT AT THE DEVIL」、CHEAP TRICK「AT BUDOKAN」(1978年)、BEACH BOYS「PET SOUNDS」(1966年)、それと……IRON MAIDEN「THE NUMBER OF THE BEAST」(1982年)。これで何枚？

——4枚。あと1枚ですね。

武道館の前の晩から興奮し過ぎて眠れなかった。(笑)
マジで、あの場所でプレイ出来るなんて光栄極まりないと思ったね。
武道館でドラムを叩き、しかもギターも弾くなんて、
こんなクールなことってある？ まさに夢が叶ったって感じだよ。

M:じゃあ、AEROSMITH「LIVE! BOOTLEG」(1978年)にしよう。

—あなたは何歳なんですか？

M:先月で44歳になった。これまでのところ、どのバンドに入っても最年少だったよ。エース・フレリーのバンドでもそうだし、今もそうだ。

—1週間前には武道館のステージに立っていたわけですが、あれはどんな経験でしたか？

M:前の晩から興奮し過ぎて眠れなかった。(笑)マジで、あの場所でプレイ出来るなんて、光栄極まりないと思ったね。あそこで初めてライブをやったバンドはBEATLESなんだろう？

—ええ、そうです。

M:凄いことだよ。それに子供の頃からCHEAP TRICKのライブ盤「AT BUDOKAN」を聴いて育った身としては……それだけじゃなくDEEP PURPLEの「MADE IN JAPAN」(1972年)がレコーディングされたり、BEATLESやKISSがプレイしたりした凄い場所なんだからね。今回、その武道館でこれまでに何回もショーをやってきたはずの他のメンバー達が皆、ナーヴァスになっていたとは言わないけど、特に気合いを入れて準備しているのが判って、なるほどな、彼らでさえこうなんだから、ドキドキするのは俺だけじゃないってことだ、と思った。しかも俺にとっては初めての武道館なんだから！ それにしても素晴らしいかったな。まさに夢が叶ったって感じだったよ。ショウが終わってホテルに戻ってから、ロビーに行ってコーンバというキューバ産の高級葉巻を買い、バーで葉巻を吸ってビールを飲んで幸せを噛み締めた。バーテンダーに「いい1日だったようですね」と言われて、「これ以上いい1日なんてあり得ないよ」って言ったんだ。

—武道館でドラムを叩いている姿をこの人には観てもらいたかったな、という人はいますか？

M:ああ、両親やワイルド、それに友人達も。CHEAP TRICKやKISSのファンが大勢いるからね。ジョン・バックマンという友人が東海岸のコネチカット州にいるんだけど、彼も素晴らしいドラマーなんだ。彼にあれこれ写真を送りつけて自慢したら、「マジかよ！」って驚いてた。(笑)

—ドラムをプレイするうえで、あなたを最もインスパイアしたドラマーと言うと？

M:たくさんいるけど……まず最初に挙げるべきはパン・E・カルロスだろうな。俺は子供の頃からCHEAP TRICKファンだったから。それからWÖTLEY CRÜEのトミー・リー。MTVで彼を観て、ドラム・ソロの仕掛けにも驚いたけど、彼は生まれつきのドラマーなんだと思う。スティックさばきも美しい。BLONDIEのクレム・パークも同じで、本当に美しいスティックさばきをするんだよ。あとは、やっぱりLED ZEPPELINのジョン・ボーナムだな。他にもたくさん過ぎて全部は挙げられないけど……BEATLESのリンゴ・ス



ターも勿論だし、ジェイムズ・ブラウンとプレイしていたジェイボ・スタークスにクライド・スタップルフィールド、HUMBLE PIEのジェリー・シャーリー、AC/DCのフィル・ラッド、サイモン・カークはBAD COMPANYのと言うよりFREEが好きだったな。SWEETのミック・タッカー、DEEP PURPLEのイアン・ヘイス……大勢いる。でも、そうだな、最大の影響と言えばジョン・ボーナムだろう。ありきたりな答えだろうけど、やっぱり彼が一番だ。

—パット・トービーと気が合いますね。(笑)

M:うん。パットと俺は出発点が一緒というか、彼が影響を受けた3大ドラマーがジョン・ボーナム、ミッチ・ミッチェル、イアン・ヘイスというのは凄く共感出来る。だから俺がMR.BIGの曲をプレイする時も、とても心地よくプレイ出来るんだと思う。誰か別のドラマーのスタイルに合わせてプレイしなきゃならない時って、かなり無理をして自分のプレイを変えなきゃいけないこともあるけど、パットのスタイルは、俺にはとても自然に感じられるんだ。幸運なことだと思うよ。

—“Living After Midnight”ではギターを弾いてコーラスを歌ってもありますね。

M:こんなシチュエーション、想像もしなかったよ。MR.BIGのショウでギターを弾くなんて！ しかも、武道館でもギターを弾いたんだぜ！ ひと晩のうちに、武道館でドラムを叩き、しかもギターも弾かせてもらえたなんて、こんなクールなことってある？ こんなことになるとは思もしなかった。あのパート・チェンジの曲はクールだし、改めてこのバンドのメンバー全員がいかに才能に溢れているかに気づかされる瞬間でもある。ビリーはベース同様にギターも楽々弾けるし、エリックはベー

スを弾きこなしているし、ボールのドラムは素晴らしい！ 彼のプレイはコージー・パウエルっぽいね。そしてパットは見事に歌える。なんて才能豊かなバンドなんだろうと思うし、本当に楽しいひとときだよ。

—もし、バンドがこのまま活動を続けてアルバムを作ることになったら、参加したいですか？

M:総ては彼ら次第だけど、彼らにそう訊かれたら、「勿論！」と答えるよ。是非やりたいね。

—あなたはソングライターでもあるんですよね？ どういうスタイルの曲を書くんですか？

M:俺がかつて組んでいたバンドAUTOMATIC MUSIC EXPLOSIONでは、CHEAP TRICKやRAMONESやジョン・ジェットっぽい音楽をやっていた。もっと歳を取ってからは、ニール・ヤングっぽい音楽か、あるいはSTOOGESっぽい感じかな。より削ぎ落とされて生々しい感じというか。メロウになるか、原初の叫びへと向かうかのどっちかだね。最近はSTOOGESにハマってしょっちゅう聴いているから、いずれそんな感じのアルバムも作ってみたい。

—ありがとうございました。最後に、新しくあなたのファンになった人達にメッセージを。

M:アリガトウ！ 皆のためにプレイ出来て、本当に光栄に思っている。皆に出会えて、皆と一緒にMR.BIGの25周年を祝えて嬉しいよ。彼らと日本のファンの間にはスペシャルな関係が築かれているってことがよく判った。今回は彼らのためにプレイ出来て本当によかったと思っている。俺には生後16か月の息子がいるんだけど、俺や息子へのプレゼントをくれた人達には心からお礼を言いたい。皆、愛してるよ。また日本に戻って来て皆に会えることを願っている。

